

# 第一次世界大戦の 発端場所「ラテン橋」

(ボスニア・ヘルツェゴビナ、サラエボ)

## Consultant 会誌編集専門委員会

### サラエボ事件

1914年6月28日、サラエボ市内を流れるミリャツカ川に架かる「ラテン橋」の右岸橋詰めで、同市を視察中のオーストリア＝ハンガリー帝国フランツ・フェルディナンド大公夫妻が、「青年ボスニア党」のセルビア人ガブリロ・プリンチップによって暗殺された。これが発端となりオーストリア＝ハンガリー帝国はセルビアに宣戦布告。これをきっかけに双方に加担する国を巻き込んだ第一次世界大戦が勃発した。終戦は1918年。

### サラエボ

ボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボは、四方を1,500～2,000m級の山々に囲まれた平均標高500mのサラエボ渓谷にある。市中央を「サラエボの川」と呼ばれるミリャツカ川が東から西へ流れる。現代のサラエボにつながる街ができたのは15世紀のオスマン帝国の統治下である。その後、サラエボはイスラム教徒と非イスラム教

徒が共存するボスニア地方の主都となった。ちなみに南部のヘルツェゴビナ地方の主都はモスタルである。

1878～1918年はオーストリア＝ハンガリー帝国に併合され、第一次・第二次世界大戦を経て、チトー大統領率いるユーゴスラビアとなった。この時期にサラエボは最も安定して発展し、1984年には第14回冬季オリンピックが開催された。

しかし、1980年のチトー大統領の死後、1990年代になって、ユーゴスラビア構成国の独立から内戦が勃発した。ボスニア・ヘルツェゴビナも1992年に独立を宣言するが、セルビア人勢力の攻撃が始まり、サラエボは多大な犠牲を払いながらも実に1,425日間に及ぶ包囲に耐え、現在に至っている。

### ラテン橋

16世紀には、ミリャツカ川を渡る現在の場所に木の橋が架けられていた。橋の名前は右岸側の地名から付けられたようである。木の橋は何度も洪水によって流失したため、1565年には石造りの橋に架け替えられた。その後、1791年に洪水で流失し、1799年に現在の橋となった。

橋長約40m、幅約4.5mの4径間の石造りアーチ橋で、橋脚は上流側が水切りのために尖っている。中央部の胸壁の両側には洪水時に通水する穴が穿たれている。基礎は直接基礎と推定される。アーチ径は中央付近が大きく、河岸側が小さい。横から見れば構造的に対称でないことは明らかで、路面の縦断勾配の頂点も中央からズレていて、何か違和感を受ける橋である。

この違和感はボスニア語、セルビア・クロアチア語、英語が併記された現地の案内板を読めば明らかになる。そこには、オーストリア＝ハンガリー帝国占領下の1886年、ミリャツカ川の整備及び周辺の近代的な道路建設に伴う右岸工事の際に、ちょうど一つ分のアーチが右岸に埋め込まれたという意味のことが記されている。対称性が失われていたことによる違和感だったのだ。元は橋長約

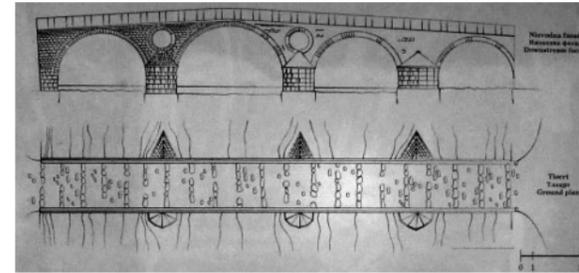


写真3 現地の案内板にあるラテン橋の図面

50mの対称な5径間の石造りアーチ橋であった。

### 現地を訪れて

ラテン橋の路面幅は想像していたよりも狭い。上下流にすぐ橋があることもあって車の通行は規制され、現在は人道橋となっている。サラエボでも古い橋の一つに数えられるが、サラエボ事件で有名にならないと、ごく普通の橋であった。セルビアが構成国の一つでもあったユーゴスラビア連邦時代は「プリンチップ橋」と改称されたが、ボスニア・ヘルツェゴビナとして独立後は、かつてのラテン橋に戻されている。

橋の右岸になる北側橋詰めの建物1階はサラエボ博物館となっている。博物館に面するプリンチップの狙撃場所には、壁に石板が埋め込まれている。かつて石板前の歩道にはプリンチップの足跡が刻まれていたらしいが、現在は撤去され、博物館エントランスの片隅に置かれている。博物館では実際の暗殺に使われたと言われるブローニング拳銃、事件を伝える新聞ボスニア・ポスト、訴訟状、事件

前後の写真、事件のあらまし、暗殺直前に市庁舎から出る大公夫妻の実物大の人形なども展示されている。

サラエボ博物館の北西がバシチャルシアと呼ばれる旧市街になる。東西文化が混じりあった街並みは実に魅力的である。職人街では銅製食器や金銀細工の工芸品をあつかう土産物屋が多い。サラエボ包囲時に使われた銃砲弾の薬きょうがアクセサリーに加工されている。空港セキュリティで問題とはならないのだろうか。また、広場には1891年に再建された「セビリ」と呼ばれる立派な水飲み場がある。かつて数多くのセビリがあったが、現在はこれが唯一のものと言う。水は問題なく飲んで美味しい。サラエボの“水”を飲むと、再びサラエボを訪れることができるらしい。セビリの水を“がぶ飲み”したことは言うまでもない。

(文 塚本敏行)

#### <参考資料>

- 1) 『サラエヴォ』マヨ・ディズダル著 純子・スポタ訳 2009年 フォーチュナ・ツアーズ・モスタル
- 2) 『ヨーロッパ橋ものがたり』成瀬輝男 1999年 東京堂出版
- 3) 『LATIN BRIDGE Historic structure』現地案内板 Commission to Preserve National Monuments
- 4) 『Sarajevo 1878-1918』Muzej Sarajeva(サラエボ博物館パンフレット)
- 5) 『Sarajevo(za poÄ\_etnike)』Society of Friends of Dubrovnik Antiquities(SFDA)

#### <取材協力>

- 1) Djekic Miho(通訳)
- 2) サラエボ博物館

#### <写真提供>

- 写真1 Society of Friends of Dubrovnik Antiquities(SFDA)  
 写真2 浅見暁  
 写真3、10 村山千晶  
 写真4、6、7、8、9 塚本敏行  
 写真5 佐藤尚  
 写真11 惣慶裕幸



写真1 市内を流れるミリャツカ川と夕焼け



写真2 ミリャツカ川左岸下流から望むラテン橋とサラエボ博物館



写真4(左) ラテン橋とサラエボ博物館  
 写真5(右) サラエボ博物館の壁に埋め込まれた狙撃を記した石板

写真6(左) フェルディナンド大公と妻ゾフィーの実物大の人形  
 写真7(右) 内戦で外壁以外が焼失し修復中の国立図書館(旧市庁舎)



写真8(左) 暗殺に使用されたとされる拳銃(サラエボ博物館)  
 写真9(右) 事件を伝えるボスニア・ポスト(サラエボ博物館)

写真10(左) 土産物に加工された薬きょう  
 写真11(右) 旧市街バシチャルシアにあるセビリ(水飲み場)